

中間言語			誤用変遷	対照分析（ラドー）→誤用分析（コーダ）→中間言語（セリンカー）
対照言語学 ：構造主義言語学+行動心理学 フリーズとラドー の対照分析。 比較言語学 ：歴史的に言語を研究する。祖語を明らかにする。				
対照言語研究：第二言習得への貢献が目的 言語類型論（タイポロジー）[形態的類型：膠着語/屈折語/孤立語 統語的類型：SOV/SVO/VSO/VOS]				
対照分析仮説：「母語と目標言語の相違点が最も母語の干渉を受ける部分であり、学習上の困難点である」と考えた				
母語と目標言語の違いの大きさと学習の困難さは比例しなかった。				
第一言語と第二言語不一致のパターン 対照分析による 学習困難度階層 → 言語間距離 を見極める				
① 分裂 ③ 新規 （中国語話者にとっての日本語の助詞） ③ 欠如 ④ 融合 ⑤ 一致 （韓国語話者にとっての「は/が」）				
語用分析：コーダー 語用の判定が難しい（エラーなのかミステイクなのか）誤用の頻度だけでは学力が図れない。（苦手文法など使わない[回避]）				
母語の異なる学習者から共通の誤用が見られた＝誤用分析では対応できない。一定の学習順序があると考えられるようになる。				
シャクターの関係節の研究：母語に関係節の無い日本語中国語話者は極力回避した結果、誤用率が低かったという実験。= 回避				
中間言語（IL）：セリンカー提唱：「第二言語習得の過程で形成する独特の言語体系」「誤用は外国語を習得していく上で自然に必要な過程である」 ピジンと類似				
中間言語の特性		中間言語連続体 ：習得によって変化して行く全体像		
体系性 ：誤用規則に体系性がある		言語間エラー ：第一言語と第二言語の際から生じる。		
普遍性 ：体系性が一貫している		正の言語転移 ：韓国語母語話者は「は/が」と同系の助詞があるので、「は/が」が理解可能。		
浸透性 ：過剰一般化、負の転移の影響を受け変化しやすい		負の言語転移 =母語干渉：文法より語彙に起きやすい		
遷移性 ：浸透性の結果、流動的狀態で、体系が改訂される。		中国語で「病」は「心配事」の意味があるので、日本語で「病」を心配事の意味で使う。		
変異性 ：同一個人内で同じ意味の異なった言語形式が出現		言語内エラー ：第2言語の学習不足が原因		
学習者の誤用だけでなく、正用も研究対象としている。		過剰一般化 ：規則の過剰適応。「*薬を買ってきた」2グループテ形活用を1グループに適応。		
学習者は「仮説を立てる」「アウトプット[検証]する」		簡略化 ：言語規則を単純化する。「東京 行きます」助詞が抜ける		
中間言語を形成する5つの要因				
言語転移 ：母語が第二言語習得に影響を与える。「本は上の机」英語圏学習者が on the table をそのまま訳したケース				
訓練場の誤用 ：教室指導や訓練が影響を与える。「夕食の後はいつも何をしていますか？」「(夕食の後はいつも)テレビを見ています。」:不自然な応答				
過剰一般化 ：目標言語の1つの規則を、異種類の項目に適応させる。「*楽しいだった」の誤用は「休みだった」「有名だった」名詞/ナ形容詞と混同した。				
「台風だから」-「*あるだから」「*難しいだから」：規則の単純化でピジンとの類似性も指摘されている。				
「学生じゃない」-「:欲しいじゃない」「*高いじゃない」				
学習ストラテジー ：学習効率を上げる方策で、「ある」は「が」が付いて「がある」とユニットで覚えた。「*熱は38度がある」38度は連用用法の数量詞				
コミュニケーションストラテジー ：助詞の選択が難しいので回避する。「先月、私 新幹線 乗りました。」				
有標性差異仮説	エックマン	有標 ：第一言語に無くて第二言語にある規則	日本人からする、英語の名詞の複数形、不規則動詞の活用	
有標性弁別仮説	非言語行動分類	無標 ：第一言語にも第二言語にもある規則	日本人からする、英語の名詞の単数形、規則動詞の活用。（日本語にある規則）	

現れ方別の誤用 ①誤形成-活用/接続/形態的な誤り 「*会いてください」「会って」 ②脱落 「みかん置いてある」「みかんが置いてある」 ③付加「兄弟は5人がいます。」「兄弟は5人います」 ④混同 「は」「が」/「てある」「ている」などの同種内の混同 ⑤位置 「気温30度がある。」「気温が30度ある。」 ⑥その他 ミスタイク：単なるいい間違い。自ら間違いに気づき修正できる。 エラー：規則が理解できていない為に起こる。繰り返し起こる。 ローカルエラー：会話に支障のないエラー「*おいしいのパン」 グローバルエラー：会話に支障が出るエラー 「友達に借りた本」と言いたいのに「友達が借りた本」になる。	段階別の誤用 ①文法的正確さに関する誤用 文法的に正しくない発話作文 「*面接を受けているウチに、アラームが鳴ってしまった。」接続詞の誤用 「面接を受けているときに、アラームが鳴ってしまった。」 ②語の選択に関する誤用：不適切なコロケーション 意味は通じるけど適切でない語を使う 「*ドアの鍵が割れた。」「ドアの鍵が壊れた」語の選択の誤り ③文章・談話における適切性に関する誤用 文法的には正しくても文脈的に適切でない 「今回実施した研究においては、インタビューをやった」スピーチレベルの誤用	
言語処理ストラテジー：工夫したことが間違っている方略 ①付加のストラテジー ある言葉や言い回しにくっつける工夫で、それが間違っている。 「それはちょっと困りますです」「厳しいな所です」 「僕はもう若いじゃない」「2か月間に勉強しました」 ②ユニット形成のストラテジー（固まり表現） セットにして言い回しを使う工夫で、それが間違っている。 「東京で住んでいます」「地域を表す名詞+「で」の工夫」 「不思議なと思う」「いいだと思う」「短くになる」	中国語母語話者の誤用 助詞の誤用が多い。（孤立語の為助詞が無い） 発音が総じて不安定（声調言語のため） 清音と濁音の区別が難しい 「了解」をよく使う。日本語の「理解」に対応する	
	ベトナム母語話者 ダ行とラ行が混同する 「や」と「じゃ」の混同 山田（じゃまだ）/じよろしく！ やめたい（じゃめたい）	
	韓国語母語話者 「つ」「ず」が言えず、「ちゅ」「じゅ」になってしまう。（韓国語は[ts][z]の音が無い） 「ちゅくえ」「ちゅかれた」「いちゅも」調音点の問題 [tsɯ][tɕɯ] 発音が尻上がりになる。（韓国語の発音が尻上がり系）日本語は山型 清音と濁音の区別が難しい	
化石化/定着化 誤りが訂正されないまま固定化した状態。上級者の「*きれくない」 逆行-バックスライディング：言えていたものが言えなくなる 「おいしかったです」と言えていたのに「*おいしいでした」と発話 ミスタイク：単なるいい間違い。自ら修正できる。	英語母語話者 漢字の習得が困難。電話連絡がレンワデンラクになってしまう。 長音の区別が困難：「おばさん」と「おばあさん」の区別が難しい	
	プラグマティック・トランスファー 語用論的転移：文法的には正しいが不適切な表現 （目上の人に）「今日は約束があるから行きません。」 （目上の人に）「欲しいですか」「私に教えることができますか」	
U字型発達 正しく使用できていた文法項目に、誤用が増えて、また再び正しく使えるようになる。逆行、後退したように見えるが前進している	中間言語の可変性：正用と誤用を繰り返しながら変化して行く現象 文法発話は学習者が注意すれば正確性が上がるが、内容に集中すると正確性は下がる。	

訂正フィードバック		アップテイク ：訂正フィードバックされた直後の学習者の発話	
タイミング		期待通りのアップテイクがあるとは限らない。	
正確さ重視の練習時は誤用の発生直後に行う		学習者「10時に駅の前に合いましょう」教師「駅の 前 に？」	
流暢さ重視の練習時は活動全体終了時に行う		誤用が訂正→リペア（○） 学習者「駅の 前 で 会いましょう」	
6種類の訂正フィードバック ①明示的～⑥暗示的		誤用が訂正されない→ニーズリペア（×）	
①明示的修正	教師が明示的に誤用を指摘して正用を示す。 「買ったの本は間違いです。『の』は不要です。」 「これは昨日買った本です」が正しいです；正用を示す	学習者 「駅の 前 に合いましょう。」	
プロンプト	教師は正答を言わず、学習者に気づかせて修正を促す	修復 ：発話の誤りを訂正。母語話者同士でもある。	
②繰り返し	誤用をそのまま上昇調イントネーションで繰り返す 「昨日買ったの本♪」	指摘と修復	「新宿に遊ぼう！！」
③明確化要求	言い直しを求める 「もう一度言ってください」	他者指摘/自己修復	「新宿にじゃないよ」「あ、新宿で」
④メタ言語的修正	文法説明など誤用を示唆するコメントをして、修正を促す 「昨日大学に行きます」 「昨日は過去だから、『た』を使います。」	自己指摘/他者修復	「新宿に・・・お・・・」「新宿で」だよ
⑤誘導	誤用の部分の手前で止めて修正を促す 「昨日大学に行っ・・・」	自己指摘/自己修復	「新宿に・・・あ・・・新宿で」
⑥リキャスト	会話の流れを切らずに、教師が正用で言い返す。 「昨日大学に行った」のですね。	他者指摘/他者修復	「新宿にではなくて、新宿で」だよ
		その他訂正フィードバック	
		テスト返却時に、語頭に対して正しい答えを書く	
		作文の添削で、誤りの部分に下線を引く	
		暗示的リキャストが フォーカス オン フォーム で推奨されている。	
		インターアクション中のやり取りに気づかない可能性も危惧される	
		リキャストの有用性を否定する説もある。	
		教師の正用による暗示的な訂正が「 プライミング効果 」として働くという説もある。	